

北九州のキリシタン遺跡巡礼の旅

夏の天候がこれほど気まぐれな年も珍しい。しかしおかげでかんかん照りが少なくその分少し過ごしやすい夏でした。それでそろそろ涼しくなるだろうと 8 月 23 日早朝新幹線に乗って一路平戸へ。着いてすぐ観光案内所に寄っている間に乗る予定にしていた生月島周遊観光バスが発車、案内嬢が気づいて追っかけてくれましたが 10 秒差で後の祭り。仕方なく貸自転車借りて平戸島を回ることにした。平戸は起伏が多く心臓破りの長い坂が続くため案内嬢が電動アシストを持ってきてくれた。しかし使い古しの中古とあってギシギシカチャカチャ、ギヤもうまく入らない代物。おまけにこの日に限って平戸はかんかん照りの猛暑。それでも午後一杯夕方の 6 時まで乗廻し疲労困憊。その日は平戸の町から少し離れた漁師民宿に一泊、質素ながらそこで食べたイカの刺身が抜群においしかった。イカといえば呼子が日本一のブランド、でもそこのお女将さん曰くには「平戸のイカがほとんど呼子へ行くのよ」。翌日バスで佐世保から長崎へ。長崎は市電とタクシーで巡り、ホテルで一泊。三日目はレンタサイクルに懲りてタクシーを時間借りして大村のキリシタン遺跡を巡った。その晩は茶どころ嬉野温泉に投宿、翌日福岡から唐津に足を延ばして鏡山の麓にある恵日寺の名庭園を見学、さらに古唐津や朝鮮からの舶載陶器を見、例の呼子のイカでも食べて帰ろうと料理屋に寄ったが 2 時から 5 時まで閉店、仕方なくコンビニでアンパン買って博多から新幹線で帰宅した。なお、唐津に行く際高速バスの運転手が恵日寺の最寄りのバス停から寺まで歩くとかなり遠いからと(腰を痛めていた小生を見て運転しながら)唐津支所に電話してタクシーをバス停に回すよう親切に連絡してくれた。おかげでそのタクシーで唐津市内をついでに回ることができた。

その後 9 月中旬の 3 連休に大分竹田で南蛮文化ウィーク(講演会やキリシタン遺物展示会など)があり出かけるつもりで宿なども予約していた。ところが一週間前になって突然血圧が急上昇(200~220)、例年の秋口症候群が出てフラフラして歩けず旅行どころではなくなった。なお、竹田にもキリシタン遺跡が多く、キリシタン文化を通じて私の住んでいる茨木市と姉妹提携を結んでいる。戦国時代のキリシタン大名で一時茨木城主だった中川氏が竹田(岡城)に転封された縁もあり、11 月には今度は茨木でキリシタンサミットが開催される。

日本最初のキリシタン受難 +++秀吉の禁教令***二十六聖人の殉教+++

日本のキリスト教伝来の歴史は西の端平戸から始まる。鹿児島に上陸したフランシスコ・ザビエルが最初に布教を開始したのが平戸である。そのころ平戸にはすでに中国から交易船が来航し松浦藩はそれによって利を得ていた。その平戸にポルトガルからの船が入ると聞いたザビエルが鹿児島から平戸にやってきた。松浦藩はポルトガルとの交易のチャンスとザビエルにキリスト教布教を許可した。それを契機にイエズス会の宣教師達が来日、キリスト教は京、大坂までまたたくまに広まった。信長をはじめ秀吉や諸大名も南蛮交易の利を狙って宣教師たちを優遇、利用したためキリシタンになった大名も増えた。領主よりもキリストを主と仰ぐ信仰の勢いに恐怖を感じるようになったためか秀吉は宣教師たちを国外追放、いわゆる伴天連追放・キリシタン禁制に踏み切った(1587)。ただし南蛮交易はむしろ奨励した。以来明治新政府が憲法で信教の自由を保障した 1889 年まで 250 年間、キリシタン達にとっては長く厳しい冬の時代を迎えることになった。熾烈な迫害を受け多数の殉教者を出しながら彼らは時の権力者とのすさまじい精神的闘争の歴史を刻んできたと言っても過言でない。このたび私が訪れた彼ら殉教者の跡地はほんの一握にすぎないが、彼らが流した血で染められたであろう砂の一粒一粒から彼らの永遠なる魂の呻きが聞こえてくるようであった。その一つ、1658 年大村の放虎原でなんの罪もなく斬首された 131 人の殉教地(右写真は処刑地に建てられた記念碑)に足を踏み入れた時なぜか土足で踏み込んではいらない畏怖を感じた。彼らの首は塩漬けにされ、長崎街道沿いの獄門前に曝されたのち胴体とは別々に埋められた。キリシタンは胴体と首を一緒に埋めると生き返るかもしれないと 500m ほど離して埋められたという。その場所に首塚と胴塚として近くの竹林と民家の一画にひっそりと記念碑が建てられていた。近隣の人が添えたのであろうか一輪の花が置かれていた。



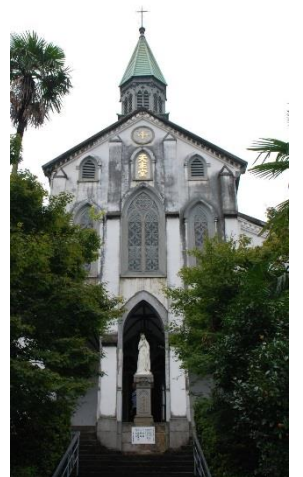
私はこれまで平戸に2回、長崎には仕事も含めて4~5回も訪れていながら二十六聖人殉教の地(原爆投下地点に近い西坂公園)には一度も訪れたことがなかった。キリシタン関連では浦上天主堂と国宝の大浦天主堂しか訪れたことがなく、それも観光客の目でしか見ていなかった。正直言ってこれまでカソリックにはそれほど関心がなかったのである。



しかし今回長崎の二十六聖人殉教記念碑のレリーフの中にずらりと並んだ26人をみてさすがに心が重かった。中には12歳から19歳までの子供も5人いる。その中で興味を引いたのは「茨木」という名をもつ人が二人いることである。私の持っている本には二人とも尾張出身のパウロ茨木とルドビコ茨木とある。記念碑の裏にある殉教記念館の学芸員に何か大阪の茨木と関係があるのか聞いてみたがやはり尾張の人としかわからないとのことであった。しかしその学芸員に館内を詳しく案内していただいて勉強になった。なお、殉教した26人のうち外国人宣教師は6人でスペイン人が4人、ポルトガルおよびメキシコ人が一人ずつである。

彼らが長崎のこの西坂で処刑されたのは旧暦1597年2月3日である。秀吉の禁教令発布から10年後のことで、秀吉死去の一年前の事件である。処刑の理由はいろいろあげられているが確たる理由は不明である。禁教後も秀吉在世中は宣教師やキリシタンに対してそれほど厳しくなく比較的寛容であつたらしい。伴天連は国外退去とされながらも数多くの宣教師が居残っていた。中でも長崎ではおおびらに布教活動がつづけられていたし、高山右近も所領を取り上げられたとはいえ加賀で堂々とキリシタン活動を展開していた。なにしろ秀吉の部下にはキリシタン大名が多かったから彼らをみんな処罰してしまうと逆に豊臣政権がなりゆかなくなる。一説によれば晩年の秀吉は梅毒でかなり毫碌して政務どころでなく、もしそうなら秀吉が26人の逮捕・処刑を直接指示したとは思えない。おそらく取り巻きの画策ではあるまいか。理由はともあれ豊臣に刃向かったりキリシタンになるとこうなるぞという見せしめであることは間違いあるまい。しかしこのような事件が結果として関ヶ原の戦いにつながったとする見方もある。キリシタンに理解を示していた秀吉配下の武将たちの多くが徳川に味方したことも事実である。

逮捕された26人は京、大坂で活動していたキリシタンで一列縦隊に後ろ手に縛られ、しかも寒い冬空のもと裸足で京都から長崎まで歩いて連行されたという。彼らは各藩順送りに一か月ほどかけて長崎西坂に到着、十字架に縛られ、両側から槍で突かれ血がほとばしり出た。それでも痛みを耐えてすべての者がキリストと聖母マリアを通して栄光の神のもとに永遠の命を得て今召されることを喜び口々に祈りを唱えながらこの世を後にしたとこの瞬間に立ち会ったルイス・フロイス(「日本史」の著者)がローマ法王庁に報告している。日本側の公式記録は抹殺されたか残っていないが、この事件はヨーロッパで広く知られるところとなった。しかしキリシタンへの迫害はこれが始まりで終わりではない。その後の徳川政権による鎖国・禁教令の布告によりキリシタンへの弾圧は強化され、明治新政権になってからもむしろ厳しい詮議が実施され浦上の潜伏キリシタン達を弾圧したため(1871)、海外からの強い非難によりようやく禁教令を解除した(1873)。それに先立つ1862年ローマ法王庁は26人を聖人に認定した。1865年に建てられた大浦天主堂はこれを記念して二十六聖人に捧げられたものである。1933年国宝に指定された(右写真)。



今長崎県では県下のカソリック教会群とキリスト教遺跡を世界遺産にと文化庁に申請している。しかし長崎県だけに特化してこれら建造物や遺跡を人類共通の普遍的な文化遺産として評価することに果たしてどれほどの価値が認められるかどうか私は個人的には疑問であるが、少なくとも信仰は生きているもので、遺産文化とは異質の次元である。

さて長崎から大村を訪れたその夜は佐賀県の嬉野温泉に宿泊した。武雄温泉の南、茶畑が広がる山間の静かな温泉である。歴史は古い。神功皇后が朝鮮遠征の帰途に発見、戦いの疲れを癒すべく湯につかり「あなうれしの」と言われたので「嬉野」と呼ばれるようになったとのことだが、真偽はともかく「肥前風土記」にその名がみえるとのこと。九州に数ある名湯の一つである。茶所の温泉とあって私が泊まった旅館(和楽園)の露天風呂には一抱えもある大きな土瓶に茶葉を

入れ、そこに温泉の湯を注ぎ、土瓶の口からお茶が露天風呂に流下する仕掛けになっている。まるでほうじ茶の中に浸かっている感じである。茶の香りが良い。そばに茶のパックが沢山ありそれを湯に浸して体に当てると筋肉の疲れも取れるような気がする。大学生風の二人の青年に会い、どこから来たのかと聞くと「韓国から」と流ちょうな日本語が戻ってきた。日本語がうまいね、どうしてこの温泉知ったのかと再び聞くと「日本を旅行したいので勉強した、インターネットで予約したが嬉野温泉や和楽園は韓国でもよく知られていて有名ですよ」とのこと。安部さんが聞いたら喜ぶだろうな!? ここ嬉野温泉は湯豆腐が有名でおいしい。一人旅で困るのは日本の温泉旅館は一人ではなかなか泊めてくれない。泊めてくれても値段が高い。しかし朝食のみというと案外泊めてもらえることがある。私も胃を切除して以来、旅館の夕食は食べきれないし、酒も飲まないし一人で食べてもおいしくないしで、長崎でもここでも夕食なしで泊まった。前もってコンビニで弁当でも買っておけば一人ならそれで十分である。長崎のような大都会なら近くにグルメレストランがいっぱいある。夕食なしの利点は旅館の到着が遅くなっても OK だし宿泊費もその分安くなる。もっとも私の好きな山奥の秘湯温泉ならば一人でも断られることはまずないし、団体も来ず客も少ない。もちろん近くにコンビニや飲食店もないので夕食付で泊まるが、山菜料理など家庭的で量も多くない。そして何よりも秘湯温泉は湯の質がよい。

最後に茨木市と豊後竹田市をつなぐ歴史秘話を一つ紹介しておこう(参照:「広報たけた」竹田キリシタンシリーズ、第16回、2013.11)。話は豊臣の大坂城落城に際しての豊後竹田の岡藩に関わる。当時の岡藩主は中川氏である。中川氏はもともと摂津茨木の豪族で茨木城主・中川清秀は隣の高槻城主・高山右近とともに荒木村重の家来であった。しかし村重の信長への謀反で村重を離れ右近らとともに信長側についた。信長死去後、秀吉の部下として黒田官兵衛、小西行長、古田織部、蒲生氏郷、細川忠興らキリシタン大名らとも親交を結ぶ仲であった。ただし清秀がキリシタンであったかどうかは不明であるが、彼の息子二人はキリシタンであった。その関係で中川氏の裏紋は十字紋(右図)で、イエズス会の紋章 IHS をデザインしているとされる。



清秀は賤ヶ岳の戦いで戦死、あとを継いだ長男秀政(茨木12万石)も朝鮮出兵で戦死、当時兵庫県三木城主(13万石)だった次男秀成が後を継いだ。岡藩6.6万石に転封された。減封は多分キリシタンという理由であったかもしれない。一説には転封に際して秀吉から宇和島か洲本(淡路)か岡のいずれかを提示されたが彼はなぜか遠く離れた豊後竹田の岡藩を選んだ。選んだか理由はいろいろ考えられるが、四方山に囲まれ要塞堅固、手つかずの山林原野が広く開発の余地がある、かつ宣教師の多い長崎に近く隠れて?キリシタン活動をするには好適地、親交の深かった加藤清正、黒田親子、小西行長、杵築の細川氏らが周囲にいたから等々が考えられている。彼ら大坂から離れた九州の地に追いやられたキリシタン大名たちは関ヶ原の戦いでは反三成の旗を掲げ徳川に味方している。関ヶ原の合戦は豊臣 vs 徳川のように見る人も多いが、これは石田三成と徳川の戦いである。

さて秘話はここからである。中川岡藩の初代となった秀成の正室は信長の武将だった佐久間氏の娘で、彼はキリシタンとして側室を生涯持たなかった。秀成の後を継いだ長男久盛の時代は徳川のキリスト教禁教下にあって特にキリシタン弾圧の厳しい時代であった。彼の正室は徳川松平家の出(松平定勝の娘)で徳川とは縁戚関係にあり、表立ったキリスト教活動はできなかったと思われるが、南蛮伝来の高度な医療技術や金属精錬技術の活用を奨励している。ところである古文書によれば大坂夏の陣で落城寸前、一人の赤子を抱えた女性が城を抜け出し、何者かの手で岡城まで逃げ延びたことが記録されているという。これは城内にいた女性の単なる脱出劇でも、誰かの創作劇でもない。後になってある公的調査で匿われた女性は「安威の方」と呼ばれた秀頼の側室、赤子は彼女の子で「お津久様」と古文書に記されており、このことから赤子は秀頼の子ではないかという。ともかく久盛はこの女性を侍女として受け入れた(岡藩・中川御年譜)が、なぜ大坂からはるか離れた岡藩を頼り、かつ秀頼の側室ほどの女性を久盛は侍女として迎えたのか大きな謎である。「安威の方」は茨木・安威の豪族の出であるため「安威の方」とよばれたが本名は「松風院 初」という。安威一族の筆頭・安威了佐は秀吉の祐筆でシモンという洗礼名を持つキリシタンであった。中川氏のあと一時茨木城代を務めていた。

ではこの「お津久様」はどうなったのか？ 久盛の子で岡藩三代目の久清は幼少のころ「津久丸」と呼ばれており、中川・御年譜によれば母親は「安威の方」とされる。ならば久盛は「安威の方」を側室として手を付けて子をなしたのであろうか？ しかしこれは津久丸こと久清の生まれ年が記録どおりだとすると矛盾する。彼が生まれたとき安威の方はまだ竹田に来ていなかったから。さらに「お津久様」と「津久丸」偶然とは思えない。誰が考えても同一人物ではないのか？ ならば三代目藩主中川久清は久盛の実子でなく「安威の方」の連れ子、すなわち秀頼の子という可能性が高まる。果たして真偽のほどはわからないが、岡藩に遺されている二代藩主久盛と三代久清の肖像画は親子とは思えないほどの相違がある。久盛は丸顔、久清は眼が大きく鼻筋の通った面長である。しかし肝心の秀頼との対比がないので何とも言えないが、どこか南蛮人風の顔つきでもある。それでキリシタン一族だった「安威の方」に外人の血が入っていたのではなどの説もある。久清が秀頼の実子かどうか確証はないが、仮にそうだとすると徳川の厳重な包囲網を突破して「安威の方」と「お津久様」が岡藩に来たのには余程の事情があったに違いない。それには誰が手引きして、なぜ岡藩が母子を匿ったのか？ 興味ある謎である。そこで私の謎解きはこうだ。久盛の奥方は松平の出、秀頼の側室とその子を匿うなど徳川方に内緒にしておけるはずがない。したがってこの事件は徳川と豊臣の密約による最高機密ではなかったかと考える。徳川方にしてみれば秀頼の正室の千姫(徳川秀忠とお江の娘)を何としてでも救出したい。豊臣方も秀頼の子だけは助けたい。そこで両者の間で密約が成立、お津久母子は交換条件でひそかに城外に連れ出されたのではあるまいか。それを仲介したのは京極家に嫁した浅井三姉妹の次女の「お初」ではなかったかと私は考える。お初は茶々・淀君とお江を結ぶ最適人物で実績もある。もしお初でなければ家康や黒田父子とも仲の良かった北政所が仲介したか？ しかし勝者の徳川としては後顧の憂いのないよう秀頼の子をそのまま放免するわけにはいかない。そこで遠方でかつ徳川と豊臣両者に刃向う懸念の少ない中立的な久盛が選ばれたのかもしれない。そしてその秘密を知っているのは久盛夫妻とごく一部の家臣のみで、久清自身も自分の出自の秘密を知らずに終えたかもしれない。というのが私の考えである。しかしこの考えにも問題はある。豊臣に恩顧がある大名の多い九州でこの秘密をどこまで守りとおせるだろうか？ さらに徳川から厳しく監視されていたであろう。しかしそれを無視してこの考えが正しいとすれば、これまで豊臣家は秀頼で絶えたことになっているが実は明治まで、いや今も豊臣の血筋は残っているということになる。なんともミステリアスな話ではないか。でもさすがに物証もなしにここまで想像たくましくしている学者はまだいないようだ。歴史の謎は後世に残しておくことも必要である。

もう少し話を付け加えれば、久清には二人の娘がいて、二人とも大柄で目が大きく色白の日本人離れした美女だったとの噂がある。次女は「夏姫」といい、富山藩主・前田正甫に嫁いたが 23 歳で早世した。ところが久清は彼女の遺骸を引取り江戸のさる寺に葬った(幕藩体制で大名は江戸屋敷に住むことが多かった)。当時嫁ぎ先から遺骸を引き取るなど普通あり得ないことで、実は夏姫がキリシタンだったからではないかとも考えられる。その後久清は夏姫の霊を慰めるべく北鎌倉の山奥に東溪院という寺院を建立した。そこには中川家の裏の紋章の十字紋が掛けられ、土地の人はキリシタン寺と呼んでいた。寺は明治の初めに取り壊され今はないが、寺の遺物には南蛮風の燭台や香炉などキリシタン関連のものも多く、それらは近くの光照寺に受け継がれている由である。東溪院は京都大徳寺の末寺で、大徳寺は黒田父子や細川忠興、蒲生氏郷などキリシタン大名たちや利休などキリシタンとゆかり(縁)の人が多く眠る寺でもある。

今回私は体調不良で竹田のキリシタンウィークには行けなかったが、11 月末には茨木でキリシタンサミットが開催される。体調が回復したら近々ぜひ天草や五島のキリシタン遺跡を巡りたいと考えている。なお、前回のエッセイで津和野のカソリック教会堂が日本唯一畳敷きと紹介しましたが、じつは天草の崎津教会も畳敷きとなっています。ここにお詫びして訂正します。

紙面に余白ができたので天正遣欧少年使節団について少し紹介する。キリシタン大名の大村忠澄や有馬晴信が 4 人の少年を巡察師ヴァリニャーノに託してローマに派遣したもので、日本人で初めてローマに到達、無事帰国した使節団である。1582 年長崎からポルトガル船に乗り 1584 年 8 月ローマ教皇グレゴリウス 13 世に謁見した。帰国は 1590 年 7 月大村に上陸した。記念碑が大村市の長崎空港に隣接して建てられている。帰国後秀吉とも面会、ヨーロッパの先進文化をくわしく説明したと言われる。その後 4 人はキリスト教布教に人生を捧げ、一人は殉教した。